

氏名 (生年月日)	ヤマ モト トモ ミ 山 本 智 美 (1993 年 12 月 25 日)
学位の種類	博士 (文学)
学位記番号	文博甲第 160 号
学位授与の日付	2023 年 3 月 16 日
学位授与の要件	中央大学学位規則第 4 条第 1 項
学位論文題目	一九九五年以降の村上春樹文学の変遷 — <コミットメント> と <継承> の相補性 —
論文審査委員	主査 宇佐美 毅 副査 山下 真史・高橋 慎也・千田 洋幸

内容の要旨及び審査の結果の要旨

1. 本論文の目的と構想

最初に本論文「一九九五年以降の村上春樹文学の変遷— <コミットメント> と <継承> の相補性—」の目的と構成を示す。

本論文の根底にあるのは、村上春樹作品の先行研究でとらえられてきた「コミットメント」概念や、「デタッチメントからコミットメントへ」という図式の見直しである。初期の村上春樹作品は、狭い人間関係に自分たちを閉じてしまう内向的、自閉的な人物たちが描かれていることが多かった。その時期の村上春樹作品の特徴を「デタッチメント」と呼び、1990年代以降、社会的な事件、ときには歴史や戦争を題材にするようになる村上春樹作品の特徴を「コミットメント」と呼ぶのが従来の研究の通例であった。とはいえ、そのような理解はあまりに図式的すぎて、今日ではそれほど有効とは思えないが、それでは村上春樹作品の変化をどのように意味づけるかという問題については、現在もさまざまな研究や評論活動がおこなわれていて、決定的な方向性が見出されていない。

こうした研究状況の中で本論文は、一九九五年以降の村上春樹文学における <コミットメント> を、主人公とそのペアになる異性との結びつきという共時的かつ小さな関わり合いを指すものと捉えている。彼らが結ばれるには、各々が象徴的な親殺しという通過儀礼を果たす必要があり、孤独な過去と決別し、精神的に独立することによって <コミットメント> は達成される。これは、村上春樹の発言の中にある <コミットメント> 概念と照応する、と本論文は指摘している。

論者が「コミットメント」をこのようにやや限定した概念として捉えるのは、これまでの研究において村上春樹作品の「コミットメント」に過大な期待を抱き、そしてその期待に十分応えられていないことを批判する、という先行研究の問題点を意識化したからである。そのため論者は、村上春樹作品の中の「コミットメント」を補うもう一つの重要な概念として「継承」という概念を提唱

する。

〈継承〉とは、一九九五年以前から村上が抱いていた、人は誰もが暴力という負の遺産を引き継ぐ存在であるという認識を前提としている。暴力の引き継ぎという限定された関心から、引き継ぎという行為そのものといかに向き合うべきかという問いへと、さらに拡大したものである。本論ではこれを〈継承〉と呼び、〈コミットメント〉と同様に村上文学を論じる上で重要な概念とみなしている。〈継承〉は親世代から子世代への記憶や意思の引き継ぎ、言い換えれば、親世代と子世代との通時的なつながりを意味する。これは象徴的な親殺しを前提とする〈コミットメント〉が対象とし得ないつながりを補うものである。

同様に〈コミットメント〉もまた〈継承〉を補う働きがある。『騎士団長殺し』の「私」は、〈継承〉により必然性のない暴力を行使し、自身の影に追いつめられる。「私」を現実世界につなぎとめるものが、〈コミットメント〉による共時的なつながりである。この二つの概念が、前景化、後景化しつつ、相補的に機能する。これが一九九五年以降の村上春樹文学の変遷であるというのが、本論文の設定した考察の構図である。

本論では、オウム真理教の信者たちが囚われていたものを便宜的にオウムの要素と呼んでいる。その場合のオウムの要素とは、孤独な過去との決別ができず、負うべき責任を教祖という親なるものに委ねた、自由を求めない依存的な姿勢のことである。〈コミットメント〉を果たす主人公たちが、象徴的な親殺しによって孤独な幼少期と決別し、精神的に独立した存在となる過程を辿る必然性はここにある。村上は〈コミットメント〉によってオウムの要素を乗り越える物語を描いているのである。同じく〈継承〉は、自由とはいかなるものかを示す機能を持つ。引き継ぐべきものと向き合い、それに責任ある態度を示すところに本当の自由、主体性の獲得がある。オウムの要素を乗り越えるという意義を持つが故に、〈コミットメント〉と〈継承〉は一九九五年以降の村上文学で重要な概念足り得ると本論文では考えられている。

以上のような目的と構想を実現するために、本論文は一九九五年以降の村上春樹文学の変遷を考察の対象とし、特に『スプートニクの恋人』『海辺のカフカ』『1Q84』『騎士団長殺し』を順に論じている。

2. 本論文の要旨

本論文では村上春樹作品を五章に分けて論じ、それに序論と結論を付している。その目次は下記の通りである。

- 序論 一九九五年以降の村上春樹文学の変遷
- 第一章 『スプートニクの恋人』論—〈コミットメント〉と通過儀礼としての暴力—
- 第二章 村上春樹文学に表れる〈継承〉の端緒
- 第三章 『海辺のカフカ』論—象徴的な母殺しと〈継承〉について—

第四章	『1Q84』における〈コミットメント〉の到達点と〈継承〉の可能性
第五章	『騎士団長殺し』に表れる〈コミットメント〉と〈継承〉の相補性
結論	村上春樹文学における〈コミットメント〉と〈継承〉の相補性

以下、本論文の要旨を記す。

第一章では、『スプートニクの恋人』に表れる〈コミットメント〉と暴力性の関係を論じている。象徴的な母殺しを行うことで、主人公のぼくとすみれは孤独な幼少期の過去と決別し、母子間の精神的な癒着から独立した個人として結びつくことができる。そのような親なるものの殺害という通過儀礼を果たすことで、主人公とそのパートナーが互いを必要とし、結びつくことになる。こうした関係が本作における〈コミットメント〉であることを論じている。ただし、こうした象徴的な母殺しによって共時的な男女の結びつきは獲得できるものの、断ち切られた前世代との関係の問題については第三章に引き継がれている。

第二章では、〈継承〉という概念の成立について論じている。一九九五年以降の村上春樹は〈データメント〉から〈コミットメント〉へ転換したと自認しているが、それと同時に、人は誰も暴力性という負の遺産を引き継いだ存在であるという認識を有している。マイケル・ギルモア『心臓を貫かれて』を翻訳したことで、その認識が確固としたものとなり、『ねじまき鳥クロニクル』第三部に表れることになる。暴力の引き継ぎという限定された関心が、引き継ぎそのものへの問題意識に拡大し、〈継承〉といかに向き合うべきかという問いに、「トニー滝谷」と「レキシントンの幽霊」で挑んでいる。しかし、この段階では、問題の提示にとどまり、明確な答えの提出には至らないというのが、本章で論じられている内容である。

第三章では、〈継承〉といかに向き合うべきかという問いへの答えを『海辺のカフカ』を通して提出したことを論じている。負の遺産を引き継ぐことになったとしても、人は〈継承〉から逃れることはできない。しかし、引き継いだものをそのまま反復するのではなく、主体的に生きるために〈継承〉を発展させることができる。これが村上春樹の提出した〈継承〉への態度である。さらに、〈継承〉が〈コミットメント〉の問題点を補うことを論じている。〈コミットメント〉のためには象徴的な母殺しという通過儀礼が必要であるが、これは自己のルーツを否定し、自死へと向かう危険性を有している。そして、母と交わる＝母殺しを行ったカフカ少年は、佐伯の意思を〈継承〉することで現実世界へ戻ることができる、というのが本章の内容である。

第四章では、象徴的な父殺しを前提とする〈コミットメント〉の問題点と、それを補う〈継承〉の萌芽が表れたことを、『1Q84』分析によって論じている。象徴的な母殺しは、精神的な母子の癒着の切断を意味し、象徴的な父殺しは、既存の制度の乗り越えを意味する。しかし『1Q84』における父殺しは、本来の父殺しの意味を持たず、孤独の乗り越えという個人的な文脈の中でのみ機能する。個人的な文脈における象徴的な父殺しを行った青豆と天吾は再会し、二人で生きる選択をするが、それは二人を追うさきがけというシステムから逃げることを意味する。象徴的な父殺しを前提とする〈コミットメント〉は、青豆と天吾に通時的なつながりから逃げることを要請する。

〈コミットメント〉が切断してしまった通時的なつながりを保持するものが〈継承〉であり、それは天吾の父親から〈謎解き〉という形で求められる。物語の終わりで、それは後景化するが、『1 Q 8 4』には〈継承〉の萌芽、それを追求する可能性が表れていて、これを引き継いだものが『騎士団長殺し』である、というのが本章で論じられていることである。

第五章では、『騎士団長殺し』を分析することで、〈コミットメント〉と〈継承〉の相補性を論じている。本作品の〈コミットメント〉は男女のペアを対象とするものではなく、主人公である「私」の日常性を回復するための他者とのつながりである。〈継承〉は、「私」が象徴的な父・雨田具彦の〈謎解き〉を行い、騎士団長の刺殺を〈代行〉することである。それは「私」にとって必然性のない暴力の行使を意味する。「私」は〈継承〉によって主体性を失い、他者の物語に同化させられる。これが〈継承〉の持つ問題点である。他者の物語に巻き込まれた「私」をつなぎとめるものが共時的なつながり、すなわち〈コミットメント〉である。〈継承〉も〈コミットメント〉も両義的なものであり、その危険な側面を補い合う相補的なものであると考察している。

以上の物語分析を通して、村上春樹が〈コミットメント〉と〈継承〉を用いて、またはその相補性を用いて挑んでいるものを考察し、これを本論文の結論としている。一九九五年以降の村上文学は、一貫してオウム真理教の信者が囚われていたものを乗り越えようとしている。本論ではこれを便宜的にオウムの要素と呼んでいる。これを乗り越えるために、個人はいかに行動すべきかを描いている。オウムの要素とは教祖と信者のみが有するものではなく、市井を生きる我々もまた有しているものである。それ故に、村上文学は我々読者の在り方をも問うものになっているというのが、本論文が提示した結論である。

3. 本論文への評価

本論文は、多くの点で重要な意義を有している。

最初に意義として挙げられることは、村上春樹作品の先行研究でとらえられてきた「コミットメント」概念を問い直し、新たな意味を提示したことである。これまでの研究においては、村上春樹作品における「コミットメント」を過大評価し、戦争や歴史、災害や暴力といった広範囲な社会的かかわりをそこに読み込もうとする傾向があった。一方で、「コミットメント」をそのように過大評価するために、村上春樹作品がそれに見合った十分な内実を備えていないという批判を招き寄せることがあった。こうした両面の先行研究を退け、本論文においては村上春樹作品における「コミットメント」を、村上春樹自身の発言に基づいて男女の結びつきによる自立と仮定している。そのような限定的な捉え方にとどめ、それゆえに村上春樹の提唱する「コミットメント」の可能性と限界を正しく考察することに成功している。村上春樹作品における「コミットメント」の概念規定を小さくとどめたことによって、その可能性の広がりや切り捨ててしまったデメリットもないわけではないが、何より先行研究の問題点を正確に指摘し、村上春樹自身の発言や作品の描写に沿った「コミットメント」評価を成し遂げたことは、本論文の第一の意義として評価できるところである。

第二の意義として、村上春樹作品における「コミットメント」と相補性を持つ「継承」概念を提唱していることが挙げられる。同時代の共時的な広がりを中心とする「コミットメント」概念に対して、本論文では過去からの通時的な概念としての「継承」を重視している。すなわち、村上春樹作品が過去の時代、過去の世代からの遺産、それはときに暴力性のような負の遺産でもあるが、そうした過去の遺産を引き継ぐ存在として描かれていることを重視し、そこからいかに個人として自立するかを複数の作品によって継続的に描き出していることを明らかにしている。しかも、「コミットメント」と「継承」は相補的な関係にあり、一方の限界が生じた場合に一方がそれを補うといった構図が村上春樹作品に強くあらわれていることを明らかにしている。こうした研究はこれまでの先行研究にはない新しい発想に基づいていて、本論文が提示した大きな意義として挙げることができる。

さらに第三の意義として、本論文がきわめて明快に、一貫した方法で一九九五年以降の村上春樹作品を意味づけていることが挙げられる。複数の作品を論じていく学位論文の記述の中では、作品によってその論じる方法や姿勢に揺れが生じ、その一貫性に疑義が生じる場合もないわけではない。その点において、本論文の研究方法与姿勢は常に一貫していて、冒頭の問題設定にささかの揺るぎも見せていないことは、本論文執筆者の強固な研究姿勢と論文構成力を明確に示すものである。

以上のことから、本論文には研究上の意義が大きく、本論文執筆者の研究者としてのすぐれた資質を示す研究となっていることは明らかである。

4. 本論文の課題

本論文は、前章に示したような多くの意義が認められる反面、いくつかの課題も指摘しておきたい。

前章で指摘した本論文の意義と表裏一体のことではあるが、論文全体を一貫した方法で貫き通しているために、かえって多くの関連する要素を捨象し、論じる可能性を自ら閉じてしまっている面がある。村上春樹作品における「コミットメント」概念を意図的に限定して捉えることによって、先行研究の過剰な意味づけを排除することに成功しているものの、それによって村上春樹作品の意義を広い社会性や歴史との関係から切り離してしまったことは否めない。

本論文のそのような論じ方は、先行研究の捉え方の面でもやや視野を狭くとしていることにつながっている。本論文の中では先行研究を文学研究の範囲に限定することが多いが、村上春樹作品に関する論壇ともいべき場が存在し、文学研究に限らない幅広い現代思想の中で村上春樹作品が論じられているという現実がある。そうした幅広さの中に拡散していく村上春樹研究を、文学研究の場において位置づけようとする本論文の姿勢が着実な成果をあげたことを認めた上で、本論文があげて自身の研究姿勢を限定的に保とうとしたことの問題もここで指摘しておきたい。

こうした課題は最終試験において指摘されたものの、論者は適切な回答をおこない、これらの課題について自覚的であることを示していた。論者は本論文で着実な成果を示すために一貫した姿勢

を保っていて、そのことで得られるものと失うものの意味を十分に理解していた。今後の研究活動を視野に入れて、自らの計画に沿って研究を進めていくという方向性を具体的に把握していることが明らかであった。ここに示したような課題は、論者の今後の研究活動の中で真摯に取り組み、解決されていくものと考えられる。

5. 結論

以上の点を総合的に考え合わせた結果、審査委員は本論文が研究史的に大きな意義を持つことを認め、全員一致で本論文に博士（文学）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。